

## 書評

Joe Bray,  
*The Language of Jane Austen:  
 Language, Style and Literature*  
 Palgrave Macmillan, 2018, v + 182 pp.

本書は、*Language, Style and Literature* シリーズの一卷であり、シェフィールド大学教授の Joe Bray 氏が2016年3月に Chawton House Library で客室研究員として在籍した間に行なったジェイン・オースティンの文体についての研究内容がまとめられている。

第1章 ‘Introduction’ では、Brownstein (2015) による、「オースティンの作品の主要な研究はプロットに焦点が置かれ、近年ようやく彼女の人生や作品の社会的もしくは歴史的背景についての研究が増えてきた」(45) という指摘について、19世紀、20世紀において広まった「オースティンは文体を持たず、彼女の作品は彼女の才能による ‘effortless product’ である」という考えが影響していると推測している。1970年代初期以降、イギリスやアメリカの文学研究において、言語に焦点が当てられるようになる中で、オースティンの文体に関する研究も盛んに行なわれた。『ワトソン家の人々』『サディントン』の現存するマニュスクリプト研究からも、オースティンが慎重に言葉や文体を選んで作品を書いた「丹念な職人」であったことが評されている。そのため、彼女の文体の特

徴として、当時の人々の生活描写の正確さや詳細さが挙げられることもあるが、著者は、オースティン小説の機知とユーモアに寄与する、「正確で詳細な描写」だけでは捉えられない、初期作品から未完の『サディントン』に見られる豊富でダイナミックな言葉の分析を試みている。

本著の特徴として、話法 (Speech) ・思考 (Thought) ・書法 (Writing) をそれぞれのスケールの中に当てはめて議論するというよりは、素早い視点の変化がもたらす多彩な効果について議論していることが挙げられる。また、オースティンの文体研究の多くが自由間接話法・思考に焦点を置いているが、著者は、発話・思考・書法における様々な提示形式を幅広く使用したり、一節の中で組み合わせたり、または移動させたりすることによってオースティンが生み出した、機知やユーモアについて明らかにしようと試みている。

第2章 ‘Point of View’ では、移動し続ける視点の柔軟さや曖昧さが、オースティンの作品の機知とユーモアに重要な役割を果たしていることを詳細に示し、さらに、オースティンの作品における全知の語り手の概念に疑問を呈している。本章の前半では、自由間接思考 (以下 FIT) の例として『分別と多感』のエレナー、マリアン、ダッシュウッド夫人の紹介の場面を挙げ、一見すると語り手による総体的で媒介的 (‘total and mediating’) な視点の

ように思われる描写の中にも、個人もしくは集団の主観的意見が隠されている可能性を指摘している。また、『高慢と偏見』の舞踏会におけるビングリーとダーシーの紹介の場面では、その視点は語り手のものというよりはむしろ、部屋にいる人たちの集合的な視点（‘collective point of view’）であると説明している。後半では、『エマ』の作品全体を通して観察者として描かれるナイトリーは、観察したことを通して正確かつ適切な判断をしていくが、ジェイン・フェアファックスとフランク・チャーチルの関係性を誤解するなど、彼が得られる情報や知識も完全ではない。著者は、ナイトリーの視点がFITで描かれることによって、語り手の存在を示唆し、彼の正確性や信頼性に疑問を投げかける効果があると考察している。

第3章 ‘The Representation of Speech’ では、オースティンの小説における鋭く巧妙な人物描写は、単に1つの話法の形式によるのではなく、形式から形式への素早い、わずかな移動によって生まれる効果によるということを、用例の中で説明しようと試みている。オースティンの文体研究において、FITを通した作中人物の繊細な心理描写に着目されることが多いため、自由間接話法（以下FIS）が無視されがちであるという。FISには、「読者と作中人物の発話との間に語り手が介入することで、読者と発話者の言葉の間に距離ができ、その言葉に皮肉的

な光を投げかける」効果があるとされるが、著者は『エマ』の用例を用いて、FISが、その他の効果のために用いられることもあると述べている。例えば、エマの視点を介してその他の人物の発話が描かれる際、FISを用いることによって、彼女の怒りや同情を表す効果があると分析している。さらに、本章の後半では、会話の中で作中人物の発話を描写する形式の違いが、発話者の自信や性格の違いを表す効果について論じている。特に、『マンスフィールド・パーク』のファニーと『説得』のアンに焦点を当て、彼女たちと、それ以外の人物の発話の描写方法の違いが、彼女たちの「傍観者」「傍聴者」としての人物描写に大きな影響を与えていることを分析している。

第4章 ‘The Representation of Thought’ では、第3章でも指摘されているように、オースティンの文体研究ではFITに焦点が置かれがちであるが、発話の場合と同様、FITだけでなく、思考と知覚のさまざまな形式の間の微妙な変化がヒロインたちの心理を生き生きと描き出し、心理的ねじれやゆがみを生み出すことを詳述している。FITの効果として、語り手の作中人物に対する感情移入を表すというのも1つの可能性であるが、感情移入という言葉では、複雑な関係を単純化してしまっている恐れがあると指摘している。『分別と多感』のエレナーと語り手の視点の曖昧さについて、エレナーの意識化された思考ではなく、

知覚が描写されていることと関わりがあると考察している。また、『エマ』では、語り手による知覚描写（以下NP）とFITの使用によって、エマがどのように自分自身を騙し、思い込みを膨らませているのかについて強調し、読者にそれがエマの根柢のない考察であることを気づかせる効果を得ていると分析している。本章の後半では、エマとは全く性格の異なった、『マンスフィールド・パーク』のファニーと、『説得』のアン心理描写に焦点を当て、発話では現れることのない2人のヒロインの揺れ動く心情が、FITやNP、その他の形式の巧みな使用を通して描かれる様子を分析している。

第5章 ‘The Representation of Writing’ では、オースティンの小説に出てくる手紙が、さまざまな形で語り手や作中人物によって読まれたり引用されたりすることで、発話や思考と同じように、書き言葉の描写にも、オースティンの文体の特徴である視点の移動や柔軟性が見られることを明らかにしようと試みている。話法のカテゴリーについて、Leech and Short (1981) のモデルでは、研究対象が発話と思考に限定されているが、その後のSemino and Short (2004) によるLancaster コーパスを用いた研究は、ニュース報道や伝記などのノンフィクションのジャンルを含むため、書き言葉の描写のためのスケールの必要性が明らかになった。オースティンの長編小説の中には、手紙の内容の描写や、

手紙の内容が引用されることが多くあり、ストーリーの展開の上でも、手紙の描写が非常に重要な役割を果たしている。そのため、書き言葉の描写方法の分類をすることで、オースティンの文体についての理解がより深まることが期待される。

著者は、オースティンの作品の中に見られる手紙の文体は、彼女が現実世界の中で書いた手紙に見られるような、話し言葉の息づかいが感じられると述べている。その上で、小説の中でも、話し言葉と書き言葉の文体が似通っている人物の例として、『分別と多感』のルーシーを挙げている。彼女の手紙における省略や急き立てるような書き方、特に話題から話題へと次々と移り変わる様子は、彼女の冷淡な虚栄心と、彼女の心変わりの速さを連想させると考察している。

第6章 ‘Morality and Vulgarity’ では、作中人物の言葉使いとその道徳性の関わりについて分析している。著者は、『ノーザンガー・アビー』のヘンリー・ティルニーを例に、正確な言葉使いに執着しすぎる人物や、『分別と多感』や『エマ』に登場する、言葉使いが下品で洗練されていない人物に焦点を当て、言葉使いに基づいて人物の道徳性の判断をすることは危険であるとオースティンが強調していると述べている。オースティンの長編小説の中では、『分別と多感』のルーシーとジェニング夫人について、その下品な言葉遣いが多いの批評家によって指摘

されているが、著者は、ルーシーの言葉遣いが、エレナーとの会話の中で、滑稽なほど格式ばった言葉遣いから、だんだんと文法的な誤りが見られる、ぶっきらぼうな話し方になってきていることを観察している。その上で、ルーシーの言葉遣いは、ただ単に下品であるのではなく、愛想良く振る舞うことはできるが、それを支える教養がないという彼女の人物像を示唆するかのようになり、より丹念に作り込まれていると分析している。一方で、ジェニング夫人については、洗練さを欠く話し方ではあるが、その話し方は不誠実さや道徳性の欠如を表している訳ではなく、むしろ彼女は思いやりのある親しみやすい人物として描かれていると論じている。その上で、人物の不誠実さや誤りを示唆するのは、ある特定の表現の使用ではなく、むしろ言葉遣いの不貫性や不適切さであると、言語的な形式的な正しさを重視する人物よりも、ジェニング夫人のように気持ちを正直に率直に表す人物が高く評価されると結論付けている。

第7章 ‘Balance and Disharmony’ では、多くの批評家がオースティンの文体をバランスのとれた調和的な文体であると評価し、彼女の文法を社会規範や礼儀正しさの一側面として考えていることに疑問を呈し、一見規則正しくないように思われる文体が、オースティンの文体の創造的な柔軟性を示すことについて検証している。オースティンの文体に影響を与えた18世紀の

作家の1人として Samuel Johnson を挙げ、その影響が見られる文体の例として、『高慢と偏見』のビングリーとダーシーや、『エマ』のエマと姉のイザベラなど、2人の性格や言葉が比較されるときに、規則正しい対照法が多く見られることを挙げている。

2人目の作家として Reverend Hugh Blair が挙げられている。彼は *Lecture on Rhetoric and Belles Letters I* の中で、文の統語について、4つの本質的な特性：簡潔さと精密さ（‘Clearness and Precision’）、統一性（‘Unity’）、表現力（‘Strength’）、調和（‘Harmony’）を指摘している。著者は、『マンズフィールド・パーク』や『ノーザンガー・アビー』の最終章の中で、それらのルールが守られているか、またどこで崩れているかについて分析している。その分析の結論として、語りの文体が調和のとれたバランスの良いものから少し逸脱したものに変化する理由として2つの可能性を提示している。1つ目は、一人称の語り手が作品中、特に物語の最後の章に出てきて、信じがたい変化を伴うようなプロットについて正当化や解明をしようとする場合である。語り手が一人称を使うこと自体、語り手の自信のなさや権威のなさを表すが、著者は、その自信や権威の揺らぎが文体を崩すことによって表現されていると考察している。さらに著者は、語りの中に話し言葉の形跡が見られる場合に文体が崩れることがあることを指摘している。語り手が読者に

語りかける場面であっても、その文体はでたらめで無秩序であるのではなく、話し言葉の多様性や柔軟性、説得力を示しており、オースティンの想像力、注意深い技巧、そして1つの伝統に固執しない寛大さの証拠であると結論づけている。

第8章 'Literal and Figurative' では、オースティンの作品における修辭的表現の使用について議論している。オースティンは言葉の修辭的な使用について懐疑的、もしくはそれを嫌っていたと考えられてきた。それに対し、著者は『マンスフィールド・パーク』や『サンディトン』の中で、修辭的表現が効果的に用いられていることに着目し、オースティンが晩年、修辭的表現の新たな創造的使用を試みていたことを検証している。『マンスフィールド・パーク』の中で、修辭的表現を好んで使うクロフォード姉弟は、狡猾で危険な人物として描かれる一方で、エドマンドのように明瞭な話し方をする人物は、ファニーだけでなく、オースティンの小説のヒロインたちによって高く評価される。つまり、修辭的表現の使用によって、作中人物の道徳性が暗示されている。一方、『サンディトン』では、パーカー氏が「サンディトン」という名前に執着する様子を示し、「名前とそれが意味するもの」の関係、すなわち換喩の使用を用例の中で説明している。そして著者は、『マンスフィールド・パーク』での試みとは異なり、『サンディトン』において、オースティ

ンは修辭的表現を人物描写のために使うというよりは、言葉と意味の関係に関わるような、より大きな問題を提起し、その解釈に読者を巻き込もうと試みていたと考察している。

第9章 'Conclusion: After Reading' では、『エマ』に焦点を当て、全知の語り手や完全な視点の存在へ疑問を投げかけている。著者は、オースティンの文体の最大の特徴である視点の移動について、微妙で、素早く、曖昧であることが多いため、読者は細部の文體的な手がかりや、わずかな変化を注意深く感知する必要があると述べている。本章では、エマの人の気持ちや状況の読み間違い、もしくは読み飛ばしの例として、ベイツ夫人の発話を挙げている。彼女の長たらしい発話の中には、物語中の秘密に関する重大な手がかりが含まれており、それを軽んじることなく、注意深く聞く（読む）ことが、作中人物はもちろん読者に求められている。その意味で、著者はベイツ夫人を、オースティンの文体をどのように読むべきかについて、教訓を与えてくれる存在であると指摘し、我々に新しい視点を提供している。

以上が本書の概要である。本書は、2章から5章では、オースティンの話法・思考・書法において、その視点の移動のすばやさや曖昧さについて議論し、多様な語りの形式が複雑に作用し合うことによって、機知やユーモア、巧みな人物描写が展開されることを議論している。また、6章から8章では、

オースティンの文体についての一般的な議論に疑問を呈し、新たな解釈の可能性を提示している。特に、言葉遣いや話し方の特徴などから得られる人物の印象を、その人物の人間性や道德観と結びつけることは危険であるという指摘は、我々読者に精読の大切さを教えてくれる。

本書は、話法研究の歴史的変遷について言及しているとともに、章ごとに話法研究とオースティンの文体研究に関する豊富な参考文献がまとめられており、大いに参考になる。

### 参考文献

- Morini, M. (2009) *Jane Austen's Narrative Techniques: A Stylistic and Pragmatic Analysis*. Farnham: Ashgate.
- Page, Norman. (1972) *The Language of Jane Austen*. Oxford: Basil Blackwell.
- Semino, E. and M. Short. (2004) *Corpus Stylistics: Speech, Writing, and Thought Presentation in a Corpus of English Writing*. London: Routledge.
- 弓削商船高等専門学校 石田 紗瑛